

札幌芸術の森美術館 展覧会一覧 2025-26

タイトル、会期、内容などが変更になる場合がございます。ご了承ください。

特別展

コスチュームジュエリー 美の変革者たち

シャネル、ディオール、スキャパレリ 小瀧千佐子コレクションより

4月19日(土)～6月22日(日)

宝石や貴金属を用いず、ガラスや貝、樹脂など多様な素材で制作される装身具・コスチュームジュエリー。宝飾品の既成概念から解放され、以降デザイナーたちが自由な発想を作品に託し、20世紀はじめのパリのモード界から、戦後はアメリカへと広く普及した。本展では、コスチュームジュエリーの世界的なコレクターである小瀧千佐子氏のコレクションから約450点を展覧し、コスチュームジュエリーの歴史的展開とその魅力を紹介する。



シャネル《ネックレス「花」モチーフ》
制作：メゾン・クリボワ 1938年
パート・ド・ヴェール・エナメル ガラス、メタル、個人蔵

B 展

所蔵品展 W.S. クラークの像

4月19日(土)～6月22日(日)

さっぽろ羊ヶ丘展望台に設置された作品を含む複数の W.S. クラーク像を検証し、関連作品や資料を展示。



坂垣道《丘の上のクラーク(エスキース)》
1976年 石膏

小松美羽 祈り 宿る

Sacred Nexus: Resonating with Cosmos

7月5日(土)～8月31日(日)

狛犬や龍などの神獣を描く現代アーティスト小松美羽(1984-)。独自の死生観を繊細な線でとらえた銅版画からキャリアを開始し、鮮烈な色彩が躍動する絵画制作へと移行。その活動領域は絵画にとどまらず、大英博物館に収蔵された陶の狛犬、そしてパブリック・アートの制作と、ますます拡張している。本展では小松の代名詞である神獣を核に、各地の民話や伝説を図像化した連作、独自の宇宙観による大型作品、そして北海道の風土や地場から想を得た新作をふくむ約70点を展覧する。



小松美羽《雪の日、エゾオオカミのスピリット達の呼びかけにたくさんの仲間たちがやって来たよ》2025年 アクリル、キャンヴァス 作家蔵

札幌美術展

下沢敏也 origin—土の命脈

9月13日(土)～11月3日(月祝)

陶によるインスタレーション作品を20年以上にわたり展開する下沢敏也(1960-)の個展を開催。従来の陶表現を越え、数メートルの高さに及ぶ柱や円環で構成されるインスタレーションには、生命の果てゆく姿と、その残り火の中から再び生れ出ようとする予感が静謐さのなかに充溢する。北海道の陶土を素材に独自の技法を探究する下沢が挑む、造形表現の今に迫る。



下沢敏也《Re-birth》(部分) 2021年 陶 (撮影：山岸靖司)

所蔵品展 豊平館の画家たち

9月13日(土)～11月3日(月祝)

北海道初の大規模な宿泊施設として設置された豊平館。芸術の森美術館所蔵作品と関連資料からその歴史を紐解き、検証する。



澤枝重雄
《明治天皇御臨幸豊平館前通御ノ図》
1939年 油彩、キャンヴァス

リフレクションズ—いつかの光

11月15日(土)～12月21日(日)

国内外で活躍する北海道ゆかりのアーティスト5組による現代美術展。風景や自然現象を鋭敏に知覚し、独自の手法であらわした作品群を通して、私たちをとりまく環境への新たな視点を提示する。

出品作家：青木陵子+伊藤存、池田光弘、国松希根太、野口里佳、平川紀道



池田光弘《double scenery》2022年

リフレクションズ—いつかの光 同時開催

道又蒼彩 版画展

11月15日(土)～12月21日(日)

北海道出身の新進作家による、社会へのまなざしから生まれた独自の木版画の世界を紹介する。



道又蒼彩《junction》
2024年 油性木版画

藤城清治展

2026年 1月17日(土)～4月12日(日)

100歳を越える今も影絵作家として精力的に制作に臨む藤城清治(1924-)の当館では11年ぶりとなる展覧会。光と影の競演で世界に向けて謳いあげるのは、「美しい地球・生きる喜び・未来」のメッセージ。自ら編み出した技術・技法でつくりあげた華麗な影絵の代表作が勢揃いするとともに、札幌会場オリジナル作品も展示予定。



当館開催時の会場風景 2014年

野外美術館

開館期間

4月29日(火祝)～11月3日(月祝)

かんじきウォーク開催期間

2026年 1月10日(土)～3月15日(日)

※積雪状況や天候の影響により、やむを得ず中止となる場合がございます。